昭和25年３月14日　第三種郵便物承認　令和４年４月１日発行（毎月１回１日発行）通巻872号

禅の友

～Zen no Tomo～

4
April 2022

ご本山だより

大本山永平寺【釈尊降誕会】

四月八日は釈尊（お釈迦さま）がお生まれになった日です。

お釈迦さまは今から二五〇〇年前頃、ネパールで釈迦族の王子としてお生まれになりました。

仏典によると、花々が咲き香るルンビニーの園でお生まれになったお釈迦さまは、七歩あるいて右手で天を指さし、左手で地を指さし、「天上天下唯我独尊」と宣言したといわれています。このとき天の神々は花びらを散らし、八大龍王は甘露の雨を降らせて、祝福したと記されています。誕生仏に甘茶をかけるのは、龍王が産湯として甘露の雨を降らせたという伝説からきています。

大本山永平寺では、この日、いろいろな花を採って花御堂を飾ります。花御堂の中には、朱塗桶を置き大庫院で乾燥甘茶を煎じて用意した甘茶を丁重に運んできて入れます。誕生仏の像をその中に安置し、二本の小さな杓子を添えて法堂の須弥壇上に飾ります。

釈尊降誕会は「出班焼香」という慇懃な法要で勤められ、両側の僧侶が二人ずつ前に進んで丁重に焼香した後、全員で九拝（九度の礼拝）します。さらに導師及び左右の両班の僧侶が須弥壇上に登り、誕生仏に甘茶を潅ぎます。修行僧一同による読経で釈尊の仏徳をたたえ、また仏の願いを感じとる大切な行持です。

道元禅師さまは『正法眼蔵』「帰依三宝」の巻に「人身得ること難し、仏法値うこと希なり」とお示しです。永平寺の修行僧一人一人が、出家して道元禅師さまのお傍で坐禅修行の毎日を過ごすということも、誠に得難き因縁ですが、その源を尋ねれば釈尊、お釈迦さまがご生誕されたからこそのご因縁です。

このご縁を大切に、今日も永平寺の修行僧は一息一息を大切に修行いたしております。

大本山永平寺
☎〇七七六・六三・三一〇二

ご本山だより

大本山總持寺【嶽山の四月】

大本山總持寺
☎〇四五・五八一・六〇二一

嶽山とは「諸嶽山總持寺」の略称で、總持寺への親愛を込めてお呼び致す名前であります。

春の兆しが日ごとに感じられる昨今、四月八日はお釈迦さまの誕生日で、「花まつり」ともいわれます。お釈迦さまはルンビニーの花園で誕生されたといわれており、その故事にならって寺院では沢山の花で飾った花御堂を作ってお祝いすることから「花まつり」と呼ばれるようになったのです。

總持寺ではこの八日と九日の両日にわたって總持寺独住第二十五世・江川辰三禅師さまの本葬儀式禮と新貫首・石附周行禅師さまの晋山開堂式禮が挙行されます。江川禅師さまは十年間の長きにわたり總持寺貫首として宗門内外にご活躍され、昨年の九月十九日九十三歳にて遷化（特に僧侶の死を意味し、現世の教化を終え、別の世に教化を移す）されました。

また總持寺独住第二十六世となられる新貫首・石附禅師さまの晋山開堂式禮は新たに住職がお寺へ入られると同時にお寺を広く開放し、皆さま方の信仰、修養の道場とする旨を宣言し、実際に、本堂（大祖堂）中央にある須弥壇上に登り、まず祈りを捧げる言葉や、報恩の言葉を、香を焚きながらお唱えし（これを香語といいます）、その式に参加している大勢の僧侶（修行僧）たちと大問答を展開して、開山以来の厳しい修行の型を示すもので、厳粛で荘厳な式なのであります。

どちらの式禮においても感染症対策を講じて縮小せざる得ない為、皆さま方には静かにお見守りくだされば幸いです。

曹洞 俳壇

選・坊城俊樹

冬銀河きらめく先に遠き日々

神奈川県　堀田 耕一

評 「銀河」という季題はことに深い情感や追憶がある。その煌めいている先とは光年の時間。人にとって銀河とは永遠に等しく、一番近いアンドロメダへも行くこともないだろう。だからこそ人は遠き日々を思う。そして同時に過去に去って行った日々のことも。

告ぐること降るほどにあり寒の星

静岡県　堤 千春

評 誰に対して告げることがあるのだろう。いままでの人生の伴侶にたいしてか、子どもたちへか、去って行った恋人や友人たちへか。寒の星とは地球にほど近い恒星であるか。その星座とて何光年も前の光がいま届いている。人の時間なんてちっぽけなもの。

◆除夜の鐘湯舟の中の亡者達　大阪府　岡 恭介

◆雪女愛想よければ器量よし　長野県　森山 昌子

◆禅寺の甍の反りや寒日和　三重県　山下 久美

◆うとうとと眼鏡もずれて日向ぼこ　兵庫県　内藤 昭子

◆にが笑ひしてゐる庭の雪達磨　愛知県　津川 起代子

◆冬凪の遙けき空に鐘一打　宮城県　阿部 徳夫

◆屋根に霜厚く濃くして屋根見えず　ロサンゼルス　井上 健一

◆大晦日撞木と鐘の間かな　東京都　鈴木 英治

◆鬼も邪もゐぬ星空へ豆を撒く　島根県　藤江 尭

◆雪兎まなこに残る涙かな　岩手県　鈴木 道昭

選者吟

ひとつ白き星の蕩(とろ)けて冬銀河

俊樹

作句小見 冬の星座を見ていた。冬の銀河を肉眼で見て、そのひとつだけ星を見つけることは無理だ。凍(い)てている銀河はすべて氷の白に閉ざされている感がある。ひとつの星は凍るよりも先に、はるか微少なる微粒子となってしまい、もう銀河に蕩けてしまった。

曹洞 歌壇

選・長澤 ちづ

ホワイトアウト即ち雪の闇はありコロナ禍・寒波年の明けたり

北海道　菅原 三江子

評 「ホワイトアウト」は視野が失われた状態で「白い闇」とも言うらしい。「雪の闇」はその意味では独自な発見の語ではないが、コロナ禍・寒波・新年と組みあわせたところに生活感覚を伴う時代の把握がある。

指をもてスマホの文字を大きくす老いし視力を宥(なだ)めて優し

山口県　濱田 道子

評 デジタル化が進み、取り残されてゆく不安を感じる高齢者は少なくない。そんな中、便利な機能もあって助かることもある。違う角度からスマホを詠い勇気づけられる。

◆定型は無限の宇宙ファインダーを覗けばしるし冬の銀河は
東京都　長谷川 瞳

◆病床に臥しいる夫の喉仏初めて見るごと見詰めていたり
福島県　小原 富子

◆契約を取れてヨイショと声上げて損保社員は資料を捲る
静岡県　末光 愛正

◆寒行の団扇太鼓の高鳴りて迫り来るなり吹雪の中を
岩手県　阿部 凞子

◆雪載せて雪捨て土手へ大型のトラック三台連なり走る
秋田県　小松 紀子

◆しろじろと雪の覆へる田の上を鷺の番の過ぎゆく夕べ
鳥取県　眞山 博充

◆海を背に腰をかがめし磯根松日本海の冬はきびしき
鳥取県　徳本 義則

◆ダムの無い一級河川に投網引く一艘ありぬ高津川とふ
島根県　横山 豪吾

◆かがり火のまわり荒れたる雪踏みて脚衰えし妻と詣ずる
岩手県　宍戸 さとる

◆早朝の散歩途中の参拝はマスク手袋帽子外さず
奈良県　鈴木 重雄

選者詠

半日に五分も遅れる時計なり夫は合わせる父の形見と

ちづ

作歌小見 鈴木さんの歌の結句「外して」でも整った一首だったのですが敢えて「外さず」とした処に、私たちが時代の転換点に立ち会っていることに気付かされます。神仏に詣でる態度まで変えてしまうコロナ禍、真に恐るべきコロナ禍です。

ハガキ１通に３句（３首）以内を俳壇、歌壇別々に住所（都道府県名から）・氏名を楷書ではっきりと記入し送付先までお送りください。